

自分だけの将来

代田中・3 藤原 優咲

私はここに、将来のことについて書こうと思う。

私は今年で中学三年生になった。三年生になったら考えなければいけないことがある。それは、卒業後の進路だ。三年生になってすぐの頃は、なるようになると思っていた。だから進路のことについて深く考えたことがなかった。しかし、周りの子は違った。なりたいたい職業があつて、そのために大学に行かないといけない。だから進学率のよい高校にしようとか、将来就職に有利になるように、資格をたくさんとりたいたいからこの高校にしよう、というような明確な目標や進路を考えている子がいた。

私は進路というのは高校卒業後までも考えていくということを生から聞くまで知らなかった。また、まだ先のことだからいいやと思っていた。しかし、周りの子においていかれるのは嫌なので、まずは、なりたいたい職業について考えてみることにした。

私は小さい頃から動物が好きだったので、動物園の飼育員になりたいと思っていた。そのときは、自分の好きなことや好きなものに合わせて考えていた。しかし、それは将来を考えるにあたって、いちばん大切なことではないと思つた。それでは、職業を決めるときにいちばん大切なことは何かと考へた。給料や職場の環境も大切だが、私はいちばんに人の役に立てるかどうかだと思つた。

私の母は、心身の障害により、日常生活が困難な高齢者の思いを聞いて、食事や排せつや入浴など、その人に合わせた身の回りのお手伝いをしている。そんな母の仕事は、とても人の役に立っていると思うし、実際に人の役に立っていると感じた出来事があった。

母の仕事は高齢者の方を相手にしているため、いつも死と隣り合

わせである。ある日、私は、母から施設の方が一人亡くなりそうだという話を聞いた。母の職業上、ありそうなことだが、その話を聞いたとき、すごく衝撃を受けた。母はいつもそんなに死と近い仕事をしていると思うと、母の気持ちはとても軽いものではないだろうなと思つた。その方は施設での生活が六年経つそうだが、今では食事も食べられなくなつて寝たきりの生活だと言っていた。

何週間か経ち、母が休日に出勤していった。嫌な予感がして、母が帰ってきてから聞いてみると、その方が亡くなつたと言っていた。私は自分の周りで亡くなつた人がいないので、死んでしまうということにあまり実感が沸かなかつた。しかし、母の知り合いが亡くなられたことを知り、呆然としてしまふくらいに悲しくなつた。

そのあと、母宛てに手紙が届いた。亡くなられた方の家族からの手紙だつた。そこには施設の方への感謝の言葉が綴られていたそうだ。その方が亡くなられたときも、家族の方から、

「大事にしていただき、ありがとうございます。」

と言われたそうだ。その話を聞いたとき、人が亡くなるという耐え難いことが起こり得る仕事を、母が続けられているのは、人に感謝されたり、人の役に立てたりしていることを実感できているからだと思つた。だから私は、職業を決めるときに大切なことは人の役に立つということだと思つた。人の役に立つのは簡単ではない。苦勞したうえで成り立つものだから、それを常にできる仕事はとてもやりがいのある仕事だと思つた。

人の役に立てる仕事って何があるのだろうかと思つたら、あることを思い出した。

私は小さいころ「さしすせそ」が言えなくて、言葉のリハビリテーションに通つていた。小さかつた私にとつて、これは楽しいものではないし、むしろとても面倒なものであつた。しかし、私が休まずに通うことができたのは、リハビリテーションの方のおかげが大きかつた。

リハビリの内容はアイスの棒を使って、舌の動かし方を学ぶという楽しいものではなかった。しかし、リハビリが終わったあとにその方は毎回、

「今日は何をして遊ぶ？」

と聞いてくれた。この遊ぶ時間のおかげで私は、嫌になることなく通うことができ、リハビリが楽しい思い出として残っている。今思い返してみると、その遊びの時間は私のことを考えてやってくれていたのだと思う。

そのときのリハビリの方がいたおかげで、私は「さしすせそ」が言えるようになった。そのリハビリの方の職業が私にとっては、いちばん人の役に立っている職業だと思った。リハビリの方の職業について調べてみると、言語聴覚士という仕事らしい。この仕事は、私のように言語に問題がある人や、聴覚、発音・発声、認知に問題がある人、摂食、嚥下の問題など、その人に合ったサービスを提供し、自分らしい生活をできるように支援する仕事だそうだ。相手の人に合わせたことをするという点で、母の仕事と似ていて人の役に立つ仕事だと確信した。

この仕事に就くには、高校を卒業した後、一般の四年制大学に入ってから、大学院で専攻して国家資格を取るか、大学や短期大学で専攻して国家資格を取るかの二つであることが調べてわかった。私は早くこの仕事に就きたいと思うので、言語聴覚士のコースがある大学に進学するという目標ができた。だから、高校は大学進学を見据えたところに行こう、という思いをもつことができた。

この目標がまだ完全に決まったわけではないが、自分の明確な目標や進路を周りの子と同じように決めることができ、追いつくことができたよううれしかった。

私の場合、職業を決めるうえで大切なことは、人の役に立つかどうかだと思っている。しかし、私の姉が思っている大切なことは、やりたいかどうかだった。人によって大切にしていることは違う。

だから、自分が考える大切なことがわかってよかったと思う。将来のことはまだわからないが、人の役に立てる人になれるよう努力していきたい。